

Rearranging  
the  
gaze

# 眼差しの手

# 入れ

2024年7月31日「水」— 9月1日「日」

休館日…8月16日「金」

婦木加奈子  
Kanakano Fuki

丸山のどか  
Nodoka Maruyama

京都芸術センター  
ギャラリー北・南  
10:00 – 20:00 | 入場無料

京都芸術センター Co-program 2024 カテゴリー B 採択企画  
主催：河村清加、京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）  
企画：河村清加  
出展作家：婦木加奈子、丸山のどか  
コーディネート：西田祥子、寺岡樹音（京都芸術センター）  
制作協力：土方大  
テクニカルコーディネート：十河陽平、齋恒太郎、村上美樹、米村優人  
設営：竹内舞、西森龍昇  
協力：向井家、池田佳穂



眼差しの赴くところに、そしてその趣を感じるときに、いま目にしている景色は「風景」として捉え直される。ある景色への「眼差し」は個人の記憶や社会的な慣習、イメージや文脈によって認識され、気づかぬうちに固定化されてゆく。そのような状況において、新鮮な気持ちで、かつ確かさをもって風景を認識するための手がかりを、2人の彫刻作家の作品に見出した。婦木加奈子はこれまで、柔らかな素材を用いた手芸的な制作手法や、生活の営みから着想した作品を手がけてきた。丸山のどかは、規格サイズの木材で制作された立体物によって、現実とは異なる光景をつくり出してきた。2人が扱う素材や、手法は異なるものの、固有の場と彫刻の関係性を取り持ち、風景に向き合う姿勢が共通する。

ギャラリー南の入り口に、やや斜めに置かれた柵を抜けると《ギャラリー南の周り》が現れる。丸山は屋外の様子を、ものの用途や意味から距離をおき捉えた。見出されたモチーフは、細部が単純化された形かつ、落ち着いたパステル調の色面で抽象化がなされている。扉の外に出て夏草が生い茂る地面を進むと、展示台、脚立、スポットライト、ワイヤーを模した立体物が点在する《展示室》にたどり着く。野にさらされ外的な変化を受け入れて、それらは佇む。そして、現実の黒い柵の前に立ったとき、展示の終わりを思いながら、既に目にしたものがより「見える」ようになったことに気づくだろう。「内」と「外」の出入りによって、なにかを「見る」ときに無意識に抱く先入観や解釈の枠組みが、ささやかに組み替わる。

「家（うち）」の物が「外」にはみ出す軒先や路地。婦木は、鉢植えが並ぶありふれた様子のなかに、私有地でありながらも外に開かれた場のおおらかさを見出した。その中に、葉を茂らせる植木鉢を模した自作の鉄製彫刻を置き様子を写した。同じ場に在ることの寛容さ、あるいは、埋まることのない他者との隔たりを可視化する。名も知らぬ、どこかの生活者が手入れする鉢植えに潜む彫刻の様相は、周りの風景と繋がりながら、敷地内の構造に支えられたフレームで仮設的に現れる。

周囲の人の様子に眼差しを向けるとき、同時に自分もその眼差しを受けている。ギャラリー北には、絵を描く時に用いられるイーゼルが、入り口に向かうようにして立ち並ぶ。描く人とその対象が不在の空間では、「見る—見られる」の関係性が、形となって浮かび上がる。婦木は、デッサンモデルをしながら受けた視線の数々を、トレーシングペーパーを用い、手で縫い合わせて立ち上げた。捉えようのないイメージを現実として、時間をかけて認識するために。まるで抜け殻のようにあやうげな彫刻は、垂らした糸をかすかに揺らし、物質としての確かさを示しながら《かろうじて立っている》。

かつては小学校として、長い歳月をかけて多くの人々に使い込まれてきた京都芸術センター。2人はそれぞれの視点で見出した光景を実際に立ち上げるべく場と向き合い、一夏の風景に「手入れ」を施した。人の手が加わりながら、風景は変化し続ける。多様な営みの名残には、いわずもがな、長い歴史や、その時代・地域の文化が内包されている。本展を通じて、そのとき見える光景以上のなにかに思いを巡らせ、長く使い込んでゆく眼差しに、手入れがなされる機会となれば幸いである。

河村清加（本展企画者）

# 丸山のどか Nodoka Maruyama

1  
ギャラリー南の周り  
Around the Gallery South  
2024  
木材  
Wood

[作家によるテキスト]  
敷地を取り囲むコンクリート塀には、数字の「1」が半分埋まったような造形物が等間隔に並び、丸石が積まれた何か、動物の壁画など明倫小学校時代の痕跡のようなものが残されている。さらに、建物の配管、室外機、木や鉢植えなど、この空間に徐々に付け足されたと思われるものが共存している。また、校庭や錦小路通へ繋がる道（外の世界）の前には鉄柵があるため、「外」だと思っていた場所は「外」でも「内」でもない場所のように思えてきた。（上方向には開けている。）

2  
展示室  
Exhibition Room  
2024  
木材  
Wood



1992 年生まれ、愛知を拠点に活動。2018 年に愛知県立芸術大学大学院美術研究科美術専攻彫刻領域修了。主な展覧会歴に、2024 年「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2024」（越後妻有里山現代美術館 MonET/ 新潟）、2023 年「味／処」（神奈川県民ホールギャラリー / 神奈川）、「アートサイト名古屋城 2023 想像の復元」（二之丸庭園 / 愛知）、2022 年「資材館」（YEBIS ART LABO / 愛知）、2020 年「アッセンブリッジ・ナゴヤ 2020」（旧・名古屋税関港察 / 愛知）などがある。

# 婦木加奈子 Kanako Fuki

3  
かろうじて立っている  
Barely Standing  
2024  
トレーシングペーパー、縫い糸  
Tracing paper, sewing thread

[作家によるテキスト]  
台に座り、ポーズを取って動かないように「物」に徹していた時に「トレース」する者の視線を発見した。台に座る私を十数人が取り囲み、そこにある「物」としての人物の姿を丹念に写し取ろうとしている。物がどんなふうそこに存在しているのかを眺めたいから、人は物を描くし作るのだと、その視線の中において思った。  
台の上の私は、こちらからもトレースする視線を投げ返すようにその風景を見ていた。  
時間が終わるとイーゼルはパタパタとたたまれていなくなって、風景がほどかれたようだった。

4-a, b, c  
ストレンジャー  
Stranger  
2024（撮影年 | a: 2022, b: 2023, c: 2023）  
写真  
Photo

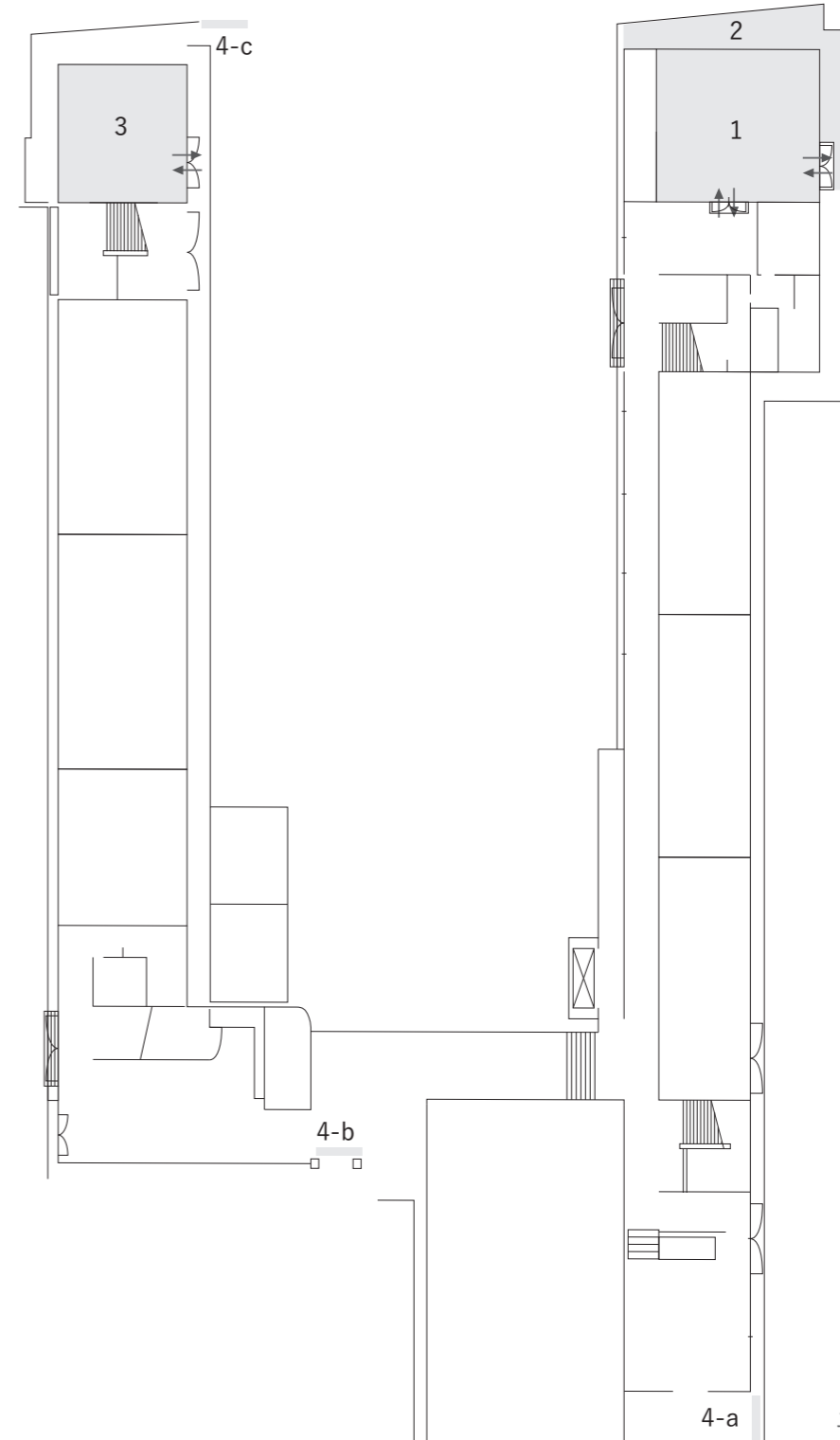


1996 年生まれ、神奈川を拠点に活動。金沢美術工芸大学を卒業後、2020 年にチェルシーカレッジオブアートグラデュエートディプロマファインアートコース修了。主な展覧会歴に、2024 年「BankART Life7 UrbanNesting: 再び都市に棲む」（BankART Station / 神奈川）、2022 年「第 1 回 MIMOCA EYE / ミモカアイ」（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 / 香川）、「TOKAS - Emerging 2022『ストレンジャー』」（トーキョーアーツアンドスペース本郷 / 東京）などがある。

# 眼差しの手入れ

ギャラリー北

ギャラリー南



エントランス